かごしま・元気都市創造フォーラム

100年先見据えた戦略を

かごしま・元気都市創造フォーラム（鹿児島市主催）は22日、鹿児島市の鹿児島サンロイヤルホテルで開き、総務省顧問の月尾嘉男氏が「IT時代の地域政策」と題して講演した。この中で月尾氏は、諸外国に比べ想像以上に立ち遅れている日本のITの現状を指摘。薩摩藩が明治維新を成し遂げたように、鹿児島から100年先を見据えた情報技術戦略を打ち出してほしいと述べた。

市民ら700人が参加したフォーラム
＝鹿児島市の鹿児島サンロイヤルホテルで

フォーラムには市民ら約700人が参加。初めに、赤崎義則鹿児島市長が「本市では情報化計画を策定、2003年を元気創造元年と位置付け、市民と手を携えた鹿児島づくりを目指している。このフォーラムが、市民とつくる市政に役立つことを期待する」と挨拶。

続いて、月尾氏はIT革命がもたらす変革として、産業経済、文化など多岐の分野から考察。1000年後の戦略は、集中構造から分散構造、物質経済から情報経済、開発主義から回復主義等々の転換を示し、鹿児島でも将来を見据え、自信を持って取り組んでほしい、と結んだ。

ISO9001認証ポイント講習会

来月3日に鹿児島市で

日本エル・シー・エー

総合経営コンサルタントの㈱日本エル・シー・エー（小林敬嗣社長、本社・京都市）は2月3日午後2時から午後4時まで、鹿児島市のKCプラザで「簡単！ISO9001認証ポイント講習会」を開く。講師はLCAチーフコンサルタントで1級土木施工管理技士、ISO9001審査員の宇都崇泰氏。

建設現場を熟知した1級土木施工管理技士の立場から、ISOの概要と取り巻く環境やシンプルでスリムなISOのポイントとは、自社に合った取り組み方などをテーマにワンポイント解説する。参加費は無料。同社の概要はホームページ（http://www.lca-j.co.jp/）参照のこと。

問い合わせは、同社（フリーダイヤル0120・194・400またはeメールims@lca-j.co.jp）田中氏まで。

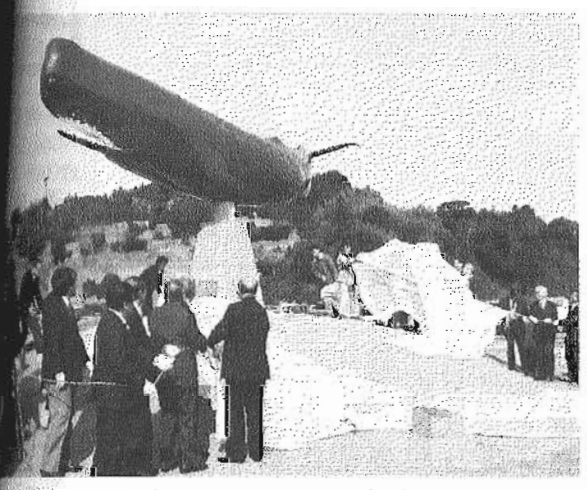
くじら記念碑除幕式

救出作業等を後世に

大浦町

川辺郡大浦町のふれあいパーク敷地内に建設が進められていたくじら記念碑が、このほど完成し除幕式が22日、前野輝行大浦町長をはじめ、管内の発注官庁代表ら約100人が出席して行われ、記念碑の建立を祝った。

14年1月22日未明、14頭のマッコウクジラが同町小湊千拓の海岸に集団座礁。当時の天候も近づけない悪天候の中での救出作業は困難を極めた。しかし、関係者らの決死の努力のかいあって、打ち上げられた14頭のうち1頭の救出に成功。その救出劇は全国ネットで報道され、自然界の生物の偉大さと生命の尊さを日本国民に改めて認識させた。今回の記念碑建立は、1頭のクジラの救出と、13頭のクジラの埋葬・位置を後世に伝えようというもの。



クジラをリアルに表現した記念碑＝大浦町の現地で

本体は、ガラス繊維プラスチックを使用することで、クジラの質感をよりリアルに表現しており、全長は座礁したクジラの大きさにあわせ10m級で再現。見る人たちにも触れやすいものとなっている。また、モニュメントの周りには死亡した13頭の墓標として円形の六万石を配置し、群れをなすクジラを大自然の求心力として表現。加えて、当時の救出作業の経緯を記した碑文と、救出劇や埋設作業を後世に伝えるため、パネルに刻み記念碑の正面に配してある。

式典の冒頭、前野町長が「この記念碑が当時の大浦町民と、くじらとの共生を願うものとなることを祈念したい」と式辞。続いて、福徳俊弘加世田総務事務所長、川原秀男県議、川野信男加世田市長らの来賓代表祝辞の後、㈱田代設計工房の田代昌弘代表が「くじらとの日々」と題した記念碑のコンセプトを説明。施工に当った同社に対して感謝状を、クジライラストを作成した大浦中学校3年生の下村愛美さんに表彰状が手渡された。

また同日は、水産総合研究センター遠洋水産研究所の加藤秀弘氏と、笠沙恵比寿博物館の大橋敏代表とが、当時の天候と、救出作業の経緯を語る。

雷害リスク低減コンソーシアム

30日に設立総会

雷害リスク低減コンソーシアム（座長、妹尾堅一郎慶応義塾大学大学院教授）の設立総会が、30日に東京都港区の国際文化会館で開かれる。設立総会では、設立趣意書、規約、幹事選任、活動方針を決める。また、併せて講演会やパネルディスカッションも行う。

雷害によってもたらされる瞬間的な電圧低下や、情報システム基盤リスクに対して、社会的に無関心なのが現状。コンソーシアムは、産学官の連携協働体制で、雷害ビジネスの交流プラットフォームを整備し、産業としての認知を促進するとともに、リスク低減に向けた社会全体への普及啓蒙活動を進める。

1月17日までに参加企業は約40社が名乗りを上げており、これら企業と学識経験者、オブザーバーの国土交通省、文部科学省（予定）などでスタートすることになっている。

木くずの受け入れを開始した鹿児島空港リサイクルセンター＝加治木町の現地で

鹿児島空港リサイクルセンター

木くず中間処理を開始

鹿島道路

鹿島道路㈱はこのほど、姶良郡加治木町の同社九州支店鹿児島営業所敷地内に木くず中間処理施設、鹿児島空港リサイクルセンター（古賀明夫所長）を建設。9日付けで県知事認可を取得し、受け入れを開始した。

従来受け入れていたアスガラ、コンクリートガラに、今回木材も加わったことから、公共工事から排出される廃棄物の主要3品目の全てを受け入れることが可能になり、ゼロエミッション達成にまた一歩近づいた。

同センターでは、山間林地における道路、治山、水防建設工事で発生する根株等の良質材を1次処理後、更に細かく2次処理することで、法面吹付の厚層基材や、家畜用敷きわらの代替品として再利用する。また、住宅建て替えにより発生した解体木くずは、1次処理後、工業用燃料として再利用する。

古賀所長は「同センターの完成は、資源の再利用と循環型リサイクルシステム構築に役立ち、地場企業への支援にもなると確信している」と語っている。

鉄筋施工技能検定試験

33人が難関に挑戦

14年度後期鉄筋施工技能検定試験が22日、国分市の県人材育成センターで実施され、主催の県職業能力開発協会職員や、県定員を務めた県技能業役員が見守る中、離島を含む県内各地から、1級21人、2級12人、計33人が難関に挑んだ。

厳しく採点する検定員
＝国分市の県人材育成センターで

28本、HOOP筋8本、柱筋10本などを時間内に図面通り組み立てる実技試験で、学科試験は2月5日に行われた。

この日に備え、現場や社内で先輩達の指導を受けながら訓練を積んできた受検者は、終始真剣な表情で取り組んでいた。そのうちの1人、1級に初挑戦した㈱小原鉄筋工業の森保夫さんは「自信は五分五分ですが、何事も経験と受けました。合格して仕事に生かせれば」と話していた。

終了した順に検定が行われたが、受検者は、採点表を手にした検定員がスペンサーの配置や結束もれ、フープの間隔など厳しくチェックする様子を、緊張した表情で見つめていた。

なお、合格発表は3月5日に予定されている。